

## 聴く姿勢や態度の意識高揚を図るオーディエンス教育の実践

黒川 マキ\*<sup>1</sup> 林 徳治\*<sup>2</sup>

＜概要＞ 本稿では、これまでプレゼンテーションの向上が話し手のみの訓練に着目されていたのに加え、聴き手であるオーディエンスの聴き方にも注目し、聴く姿勢や態度について意識の高揚を図るオーディエンス教育に関する大学授業の実践について報告する。

＜キーワード＞ オーディエンス教育、プレゼンテーション、聴く姿勢・態度

### 1. はじめに

プレゼンテーションを行った際に話し手が得る達成感や満足度は、聴き手が示す姿勢や態度によって違いが生じるといっても過言ではない。無関心な醒めた態度で話し手を見るなど受身的・消極的な聴き方は、話し手に無力感や疎外感を与え、不安と緊張の精神状態の中で話し続けることを余儀なくする。反対に、聴き手が適切にうなずき、穏やかな表情で微笑み返すなど、聴き手自らが能動的・積極的な参加を心がけることによって、話し手に集団の中での一体感や安堵感を与えることにつながる。

先行研究<sup>1)</sup>で行った大学授業での調査結果より、話し手の多くは自分のプレゼンテーション評価については気になるが、聴き手の様子を観察できず一方的なプレゼンテーションに終わっていることが明らかになった。

### 2. オーディエンス教育の実践提案

#### (1) オーディエンス教育のねらい

オーディエンス教育は、聴き手に聴く姿勢や態度を意識させ自ら気づく（リフレクション）ためのものである。下位目標には、聴き方が話し手の話す意欲に影響することによって、話し手の意欲を高め、損なう要因を知ることによって、話し手の意欲を高めプレゼンテーションの向上に相乗効果を得ることとした。

#### (2) オーディエンス教育の訓練法

オーディエンス教育を効果的に実施するために、聴き手と話し手の相互作用を重視したものになるよう以下に示す4項目に配慮した訓練法を提案した。

① 聴き手と話し手が相互に作用する「場」を

提供する

- ② 聴き方を内省し意識化する
- ③ 話し手が聴き手の様子を観察（アイコンタクト）できる
- ④ 楽しみながら訓練できる

#### (3) 聴き方タイプ<sup>2)</sup>

オーディエンス教育では、5つの聴き方タイプ（仲間意識型（図1）、無反応型、注意散漫型、威圧型、自己中心型（図2））を提案し、聴き手がこれらを意識的に演じることによって聴き方に対する気づきを促すこととした。



図1 オーディエンス教育の様子（仲間意識型）



図2 オーディエンス教育の様子（自己中心型）

\*<sup>1</sup> KUROKAWA, Maki : 大阪学院大学 e-mail= makkie@oak.ocn.ne.jp

\*<sup>2</sup> HAYASHI, Tokuji : 山口大学 e-mail= hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

### 3. オーディエンス教育の実践

#### (1) 実践内容・方法

- ・対象者：O大学 平成19年度前期「情報処理演習Ⅰ」受講者1～4年生19名  
K短大 平成19年度「プレゼンテーション」受講者2年生28名
- ・実施日：O大学 2007年5月10日  
K短大 2007年5月18日
- ・内容・方法：

オーディエンス教育は、5～6名一組のグループに分かれ、話し手と聴き手を交替しながらプレゼンテーションを行う。テーマは、一人3分の自己紹介とした。「聴き方タイプ」の型別に5種類のカードを作成し、プレゼンテーションの際に話し手が引いたカードに合わせて聴き手全員が同じ聴き方を演じる。プレゼンテーション実施後、以上のことをもとに聴き手と話し手の各々が「振り返りシート」に記述した。

#### (2) 実践結果・考察

振り返りシートは、話し手と聴き手の各々の立場から記述した。聴き手は、自分が演じた聴き方タイプと姿勢や態度について記述した。話し手は、聴き手の様子を観察した上で、「1.とても話しにくかった」～「5.とても話しやすかった」の5段階評価およびその理由を記述した。以下、振り返りシートの記述結果をもとに本実践について考察した。誌面の都合上、聴き手の考察については割愛した。有効回答率は、O大学100%、K短大は78.6%である。

#### ② 話しやすさの度合いと理由について (図3)

話し手の回答結果より、聴き方タイプが仲間意識型の場合にもっとも話しやすく、自己中心型の場合にもっとも話しにくいことが明らかにになった。

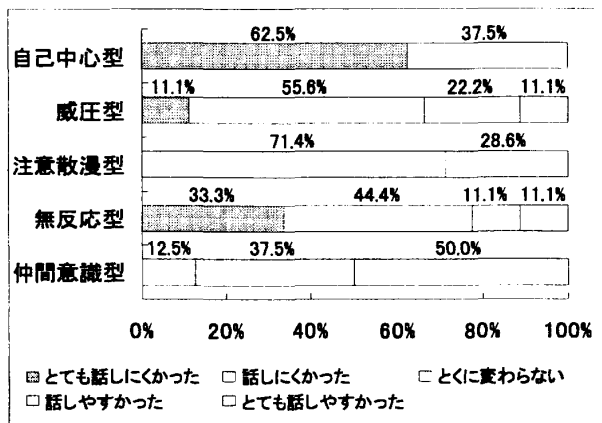


図3 話しやすさの度合い

仲間意識型の場合、「とても話しやすかった」50.0%、「話しやすかった」37.5%、合わせて90%近くを占める。その理由として、「うなづきや笑顔を返し熱心に聴いてくれていることがわかり話しやすい」という意見が多数を占めていた。一方で、「話しにくかった」との回答も12.5%であった。これは、「真剣な目つきでじっと見られていることが辛く感じた」という意見であり、仲間意識を強めたことが話し手にとって重圧になった結果であると考えられる。

自己中心型の場合、「とても話しにくかった」62.5%、「話しにくかった」37.5%、100%の者が話しにくいと感じた。その理由として、「本当に聴いてくれているのかわからず腹立たしく、特に親しい友達に対して余計にそう感じる」、「前に立って何をしたらいいのかわからなくなる」、「後味も悪くやりがいがいい」などの意見が多かった。自己中心的な聴き方では、話し手が焦燥感に追われたり、なげやりな気持ちになることがわかる。

### 4. 今後の課題

#### (1) 聴き方タイプの再検討

実践の際、「自分はどのタイプにも該当しない」という意見が聞かれたことから、現在提案している5つの聴き方タイプを再検討し、他の聴き方についても補う必要がある。その一つに「真面目型」がある。これは、話を真剣に聴き、間違いや矛盾点や理解できない点があれば話し手に質問するような聴き方である。「仲間意識型」と比べ、話し手に対してより堅く、厳しい見方をもった態度といえる。

#### (2) 聴き方と話し手の意欲との因果関係

オーディエンス教育は、受身的・消極的な聴き方が話し手に無力感や疎外感を与え、能動的・積極的な聴き方が一体感や安堵感を与えるという信念により取り組んでいる。このことは経験則によるもので、聴き方と話し手への影響について因果関係を明らかにするための実証的研究を今後進める必要がある。

#### 【引用・参考文献】

- 1) 黒川マキ・林徳治：「オーディエンスに着目した効果的なプレゼンテーション技術の実証研究」日本教育情報学会第21回年会論文集，2005，pp.244-245
- 2) 林徳治・沖裕貴：『必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学』ぎょうせい，2007，pp.26-33